

山崎御主裁

NO. 118
24.3.10
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
春名俊夫

江戸大地震の山崎藩の受けとめについて

山崎本多藩『覚帳』から

(財) 山崎本多藩記念館

一 はじめに

安政二年(一八五五年)の山崎藩『覚帳』(公用日誌)を読んでいると江戸安政大地震の生々しい記録が記載されていた。江戸の日誌に書かれているので国元の日誌にはと調べてみると、十月二日夜の大地震が飛脚により百六十四里離れているここ山崎へ十月七日夕刻には届けられていたのにはびっくりしました。

お姫様が下敷きになり亡くなられているし、上屋敷も下屋敷も潰れるなどの大被害で江戸でも国元でも、その対応に追われている様子や幕府の対応などもこと細かに記載されているので、今回はこの「江戸安政の大地震」を繙いてみることにしました。

昨年三月十一日十四時四十六分の東日本大地震は太平洋戦争の

目次

江戸大地震の山崎藩の受けとめについて	1
(財) 山崎本多藩記念館	1
塩田城	11
金谷鏡と同型鏡の三重県桑名郡(現桑名市)	11
多度町多度山の神社出土鏡の	11
現地調査について	15
片山 昭悟	15
新篠の丸私記(三)	20
深川 定義	20
研修旅行に参加して	22
宗平 圭司	22
事務局だより	24

戦後から完全に脱却し、新たな文明の基軸をつくらうとしていた日本を震撼させました。自然エネルギーへの再評価、持続可能な発展、生活の質を洗い直すこと等、喫緊の課題は多い。しかしその前に、津波に奪われた二万三千余名を超す命への深い悲しみは、戦後最大の規模のものであり、壊滅したインフラは三十兆円に達するともいわれています。避難所で暮らす人は八万人を超し、惨禍はまだ傷跡を残しています。被災された方の心が癒やされ、一日も早い復旧を願うばかりです。

安政二年十月二日の地震は一万余名の人命を奪い、江戸のまち

の大半を灰燼に帰せしめました。この災害が山崎藩に引き起こした事々を江戸と山崎の記録（文書）から整理、分析することにより新しい知見の喜びや、些かの教訓を引き出すことが出来ればと願います。

二 江戸大地震のころ

嘉永六（一八五三）年、「日本列島の地上と地下で二つの激しい動乱が口火を切った。」と地震学者石橋克彦は記しています①。

一つは、黒煙を吐く、大砲を常備した小山のような軍艦に乗ったペリー来訪で、幕末の外交と内政に衝撃を与えました。もう一つは、嘉永六年二月に起きたマグニチュード七の嘉永小田原地震です。小田原城の天守閣が大破し、藩主の屋敷や役所が半壊し、離れた江戸城の大手門渡り櫓内の壁は残らず落ちたと伝えられています。この九ヶ月後安政南海地震（震度六）、続いて約三十分間後安政南海地震（マグニチュード八・四）が起きました。

安政二年の安政江戸地震の二年前から大地鳴動が起こっていたのです。

三 江戸大地震の規模

期日 安政二年十月二日（新暦では十一月十一日）午後十時頃
規模 直下型、震央は荒川河口付近（隅田川東岸の深川など埋め立て地は被害が多く、洪積台地に沖積がみられる山崎藩上屋敷の

ある日本橋地区は被害が少なかった。

マグニチュードは六・九、震度六といわれる。メカニズムは大陸プレート内地震か海洋プレート内地震と推定されている。

前兆現象として江戸市中で水がわき出し、地震に際しては江戸川沿いの桑川では液状化がみられた。

被害 地震後三十分、五十余ヶ所から出火、二・二平方キロ（関東大震災の一七分の一）を焼失、旗本御家人の屋敷は八〇％が焼失・全壊・半壊または破損した。

江戸城、諸大名屋敷、民家、社寺とも被害甚大と記されている。倒壊一万四千戸以上（倒壊率は一〇％、関東大震災の旧一五区の四％に比べ高い）、町方の死者四七〇〇人、武家方、社寺方を含めると死者は一万人を超えると言われている。

大名については、二六六家の内一一七家が被災し、少なくとも一八六〇人が死亡となっています②。

水戸藩邸では藤田東湖、戸田中太夫が圧死し、藩主斉昭のブレインの死は水戸藩に大きな打撃となりました。

四 山崎藩の被害

江戸『覚帳』の記述を整理すると左表のようになります。

1 死者は、七名で、相対的に少し多い。アバウトであるが、山崎藩の死亡率は山崎藩江戸屋敷関係者は総数で二百名（『本多藩時代の山崎』第二集二〇頁参照）なので三・七％、トータルに

山 崎 藩 の 被 害		
死亡	7名 内訳 上屋敷など5 下屋敷2	丸崩れ10 半壊2 大損2
氏名	御鈴様 奥女中3 毛利慶左衛門 門番夫婦	丸崩れ：表門、住居 向、長屋一棟、稽古 場、土蔵。下屋敷の 表門、住居、土蔵、 長屋など
概要		

言えます。

3 他の大名家と比較すると、被害は甚大ではないが、大であったと言えます。前述している水戸藩の例や、焼失した二、三の大名屋敷、中でも会津藩の被害は甚大でした。上屋敷がほとんど全壊・焼失、下屋敷が全半壊し一五九名が死亡しました。また震災後、藩主が老中首座に任じられた佐倉藩は藩邸全焼、四一名が死亡、藩主正睦は、下敷きになり足に怪我をしたまま登城した③と記録されています。

註 ① 石橋克彦『大地動乱の時代』岩波新書 一九九四年版

一五〇四頁

② 石橋克彦 『前掲書』 四七頁

③ 石橋克彦 『前掲書』 四八頁

は、江戸の全人口百万として一万人の死亡で、平均死亡率一%であった。姫君（御鈴様）の死は関係者の深く悼むところであったと記されています。

2 建造物は、一四ヶ所の被害です。大名家の被災率は四四%、復興資金一五〇〇両を勘案すると、藩にとって被害は大きかったと

その他本文の記述は、『ウィキペディア』及び、寒川旭『地震の日本史』中公新書を参考にしました。

五 江戸『覚帳』の記述から（三日から十四日）

安政二年十月二日夜の地震のことは、江戸覚帳では三日付けで書かれている。二日夜半から三日にかけて混乱と緊張の連続であった。覚帳を現代語訳してその記述をたどってみよう。

（一）二日夜から三日朝方まで

二日四つ時（夜十時）頃、地震が起こった。

上屋敷の奥住居（藩主とその家族が住む）は残らず倒壊した。藩主忠鄰・嫡子忠明・忠鄰の姪於仁は無事で馬場に避難したが、忠鄰夫人と忠明の弟栄九郎・妹於鈴は下敷きになった。

駆けつけた者が寝室付近の屋根を取り除いたところ、声がかすかに聞こえた。すぐ覆っていた板などをこじ開け、夫人と栄九郎は怪我もなく救助されたので一同安心した。しかし、お鈴は子守役に抱かれた状態でようやく助け出されたが、藩医の西村接齊が診た時にはすでに治療が間に合わなかった。

その外、女中三人、御広敷役の野崎藤兵衛、御錠口役一人、小使中間一人が下敷きになった。これまたすぐ掘り出したが女中三人は即死、それ以外は怪我はしたものの、命に別状はなかった。

山崎藩上屋敷では、表御門をはじめ、お座敷、居間、玄関、奥土蔵、外側の練り扉などは全壊の状態であった。

その上、小川町・浅草・本所・深川・丸の内・八丁堀などおよそ三十カ所で火災が発生した。いずれの火災も藩邸よりは遠く、風向きからみても大丈夫だと思えた。しかし、火勢が激しくなったり近辺で出火した場合は逃げ場もないので、万一に備え高瀬舟一隻を借りて永久橋際の掘り割りに繋ぎ番人を乗せておいた。

藩主忠鄰と若殿忠明はすぐ江戸城に挨拶に行った。しかし、道には地割れが多く、乗馬では危ないので徒歩で行った。途中、姫路藩酒井家の屋敷も出火していたので、一橋家の屋敷付近で回りをした。江戸城は、大手門も倒れ馬の乗り降りをする場所も焼けていたが、藩主と若殿はやがて無事藩邸に帰ってきた。

その後も余震が続いたので、馬場に雨戸や障子で囲いを作り、両殿様はその中に入った。家中の者も同様の囲いを作ってその中に入り、陽暦でいえば十一月中旬の寒い夜を過ごした。その内に夜明けとなり、あちこちの火事も鎮火したようなので、藩邸内の空き地に陣張りをして仮小屋を造り、そこに藩主の一家は入った。

(2) 三日の朝から晩まで

この地震のことは国元宍粟へ手紙を書き、五日限りの間便（五日で届く）で送った。国元覚帳によると、その知らせは十月七日の七つ時（午後四時ごろ）に山崎に到着した。

上屋敷の玄関は倒壊したので、今まで玄関でしていた来客取次などの仕事は玄関前で行うことにした。玄関前には纏（まとい）

や長柄（ながえ）など藩名を示すものを置かせ、また崩れた堀の場所には幕を張らせた。

下屋敷の様子を見に行かせたところ、住居・土蔵・長屋など残らず倒壊し、門番夫婦は即死したということがわかった。早速、表御門に纏を立て、屋敷には幕を張らせた。

この地震で住居が被災し皆困っているのに、江戸詰め藩士や足軽・中間に対して藩から一時金が出されることになった。

幕府との関係では、御用番（月当番の老中）への挨拶や、幕府幹部宅への見舞には、藩を代表して白鳥清が見舞いに行った。

親戚筋の本中書様の屋敷には留守居役が見舞いに行った。藩邸の上屋敷は類焼したが本郷の森川宿に避難して無事とのことであった。

(3) 四日の記述

仮設の藩邸を建てたいが、江戸全体で人夫が不足して無理である。そのため藩の家来は全て、上屋敷の片づけ作業に従事した。夕方には酒が出された。

昨夜幕府から書付けが届き、万石以上の大名は月当番の老中に挨拶に来るようにとのことだった。本日、藩主の忠鄰が腰痛のため、白鳥清が代理で行った。

この日幕府から届いた令達は以下の通り

①江戸全体が材木不足であるため、江戸城の修理も差し控えている。各大名の屋敷についても、本当に必要な箇所のみ軽く修

理する程度にとどめること。

②月次御礼は本年中はしない。「つきなみおんれい」：大名が毎月決まった日に江戸城に行き将軍に挨拶する儀式」

③大名屋敷も被害で大変だろうから、各大名は一時的に国元に帰ってもよい。

④老中の屋敷も被災したので、月当番の老中が朝のうちに自宅で来客に応接することは当分の間中止する。

これらの幕府からの書状は、将軍が各大名を支配することを象徴していた参勤交代や江戸城での儀式が、一時的ではあれ取りやめになったことであり、震災の影響を物語っている。

三日の記述には上屋敷の奥女中三人の死去が、四日の記述には下屋敷の門番夫婦の死去が記されている。奥女中の遺体は「宿元」（やどもと）を通じて親元に引渡され、門番夫婦の遺体は「請人」に引渡されている。この「宿元」とは、奉公人の保証人（請人）となって各藩などに人材を派遣する業者であろう。このような記述にも、江戸時代の身分と雇用形態が示されていると思う。

最後に、亡くなった姫君お鈴の葬式について。藩主の先祖と関係の深い雲光院という寺も被災し、かつ死者数も多かったため葬儀は出来ないとのことで、取りあえず遺骸を寺に預けた。

(4) 五日の記述

この地震による藩邸の被害について、幕府に報告した。損害の度合いごとに要約すると、

上屋敷（浜町蛸殻町にあり）

丸潰れ：御門、住居、長屋一棟、稽古場、土蔵一カ所

丸倒れ：外堀、隣境の練り堀

半潰れ・大損：玄関、座敷、長屋一棟、土蔵四カ所

下屋敷（本所林町にあり）

丸潰れ：表門・住居・土蔵二カ所・長屋一棟

尚、藩邸関係の死者・怪我人の届け出については、留守居役が他の藩の情報を集めた。諸藩は今回は届け出ないとのことで、それに合わせて報告しなかった。ここには留守居役の活発な情報収集と調整の仕事ぶりがうかがえる。

武家方の死者約二七〇〇人という数字は、十月中旬の幕府の第二回目の調査結果であろう（ちなみに町方死者は約四三〇〇人）。幕府の調査結果が世間に広まり、死者何万・何十万という噂も消えたようだ。

(5) 六日の記述

幕府からは諸大名に対して次のような書付がきた。

この度の地震で家が丸潰れまたは半潰れの大名は、類焼被災者

と同様に休暇をとってよい。但し仕事に支障がでないよう考慮し、お互い休みを調整してやりくりすること。

(6) 七日の記述

藩王忠鄰はお供揃いで登城した。

この日、御仮小屋（仮設の藩邸）の建設のため、地鎮祭が行われた。藩邸内の空き地に建てる仮御殿には、古い材木が使われるが、大工は糸七である。家来用の長屋も潰れたので、裏門内に掘建小屋（仮設住宅）を建てるが、大工は重作である。

明日、蘭香院様・真性院様の法事であるが、お鈴姫の初七日なのでそれを兼ねて、権左衛門が雲光院にお参りに行った。

(7) 九日の記述

浜町蛸殻町の上屋敷および本所林町五丁目の下屋敷は、いずれも修理のため仮の板囲いが三尺ほど通りにはみ出る。そのことを、幕府の小普請方という役所に白鳥清が届け出た。

(8) 十四日の記述

幕府から書付が届いた。

江戸の地震・火災のあと、材木その他の物価が上がっている。

不当な値上げは違法行為であり処罰する。この命令を全国の幕府領・大名領にもれなく伝えるべき事。

江戸ではすでに地震直後から町奉行所が、職人手間賃および諸

物価の値上げ禁止令を何回も出していった。十月中旬になって幕府は、江戸だけでなく地方（在方）の元売り値段や運賃も上がっていると判断し、この全国向けの禁止令を出した。人口が圧倒的に多い江戸では、災害からの復興もまた「物と金」の動きを劇的に活発化したのかも知れない。

註

於仁（おきみ）…忠鄰の姪 以下「お仁」と表記

於鈴（おすず）…以下「お鈴」と表記

御広敷（おひろしき）…上屋敷の奥向きの世話役と思われる。

御錠口（おじょうぐち）…大名邸宅の私生活の場（奥）と公の

場（表）の境目を守る役

小使中間老人…抱守（だきもり）と同じく武家奉公人である

う。

上屋敷…藩主とその家族が住み、藩の政治機能の中心。藩邸。

今の東京都中央区蛸殻町にあった。

下屋敷…藩の江戸における財政機能の中心、今の江東区か。

本中書…岡崎藩主本多忠民（ただもと）は「中務少輔」の官職

を名乗ることが多かった。中務省は中書省ともいった

ので「中書様」とも呼ばれた。

留守居役…江戸の藩邸で情報を集め、幕府や他の藩との折衝や

交流をする役目。

六 国元『覚帳』の記述から（七日から八日）

安政二年十月二日の江戸大地震の報は播磨山崎藩の人たちに深い悲しみをもって受けとめられたことでした。マグニチュード六・九の激震の中で江戸の屋敷が壊滅的な打撃を受け、さらに姫君と家士等七名が死去したのです。山崎では、岩崎家老が藩士一同を屋敷に非常召集し、被害の概要を説明するとともに、要請のあった復興資金調達にとりかかります。要請のあった千五百兩は、当時の郷方の貢租全てを米換算にして六千四百六十石であった時代としては、半端な数字ではなく、しかも復興予算額が貢租収入の二十三％に達することからしても財政の大きな危機を意味しました。

藩庁の対応は早く、大坂屈指の豪商千草屋の支援を先ず取り付けました。町方の商人達が進んで支援を申し出ました。この様子が公文書の記録にふさわしく、簡潔で要を得た筆の運びで記されています。

山崎藩とその領民にとってこの地震は災害のダブルパンチという意味で未曾有の大変な時代の始まりでもありました。

地震の七ヶ月前、大火が本町、西新町の大半を焼き尽くしてしまいました。山崎の火事からの復興に加えて、江戸屋敷復興という重圧が山崎藩にかかってきました。驚きは、このような厳しい状況の中で集まった江戸屋敷復興資金は、町方・郷方合わせて、なんと二千六百三十七兩に達したということです。領民の懐の大きさに改めて注目し、農業・商業の実態、商品性作物、手工業品など

の動きについて広い視点からの考察が必要であると思った次第です。

（一）十月七日の記述

一 今、午後四時過ぎ、江戸の藩邸が三日に出した油紙包みの書状が五日限りで届ける特急飛脚便で着いた。開封してみると、去る二日夜、十時頃、江戸は大地震。奥御殿は残らず震り潰れ、御玄関、御稽古場、表御門も潰れた。表御殿その外、御長屋などは半潰れ、御下屋敷、御長屋は残らず潰れた。

両殿様、於仁様には、御馬場に御立退き、無事であったが、御奥様、栄九郎様、於鈴様が倒壊物の下に埋られた。掘り上げたところ、御奥様、栄九郎様には御無事であった。ただ、於鈴様には大変残念で痛ましいことだったが、事切れておられたとのこと、何とも驚き入ったことであった。

直ちに留守を預かる家老の岩崎又左衛門殿は、御役所へ登庁し御横目以上の御役人全てを招集し、江戸藩邸の緊急事態を伝えるとともに、御西屋敷の御子様方へも、御用人にお伝えさせた。家老は、御家中全員には、すぐに、御殿へ集まり、揃い次第、両殿様の御機嫌を遙か山崎から祈念すること、又、於鈴様は予断を許さない状態と伝え、幹部には非常時もあり得ると申し渡した。

先ず御仮葬、続いて公示とお考えを伝えてきたので、明八日、八時揃って御家中一同、御屋敷へ出頭し、御機嫌を伺う事を伝える旨横目へ申し伝えた。

もつとも、今晚、全員が出頭したので、特別に触書を出さず前記のよう心得るよう、あわせて全員、慎み、喪に服するよう伝えた。

一 このように伝えたと、まもなく全員が揃ったと伝えてきたので、御玄関より御広間入り口へ一同並ばせ、家老又左衛門殿（祐筆からは・方となる）御書院二の間へ進み拝謁した。

一 明後十月九日は、藩侯の二男 知四郎様の丸岡藩への養子縁組に係る御祝の日としていたが、江戸屋敷が地震で大災厄を受けているので、延期、御祝いは追って通知すると横目に伝えた。

一 大雲寺は、この度の不幸に対し、お悔やみの伺いとして、執政四郎右衛門宅を訪れた。

一 江戸御屋敷の破損について、取りあえず金千五百両（現価で三億円前後）を用意するよう言ってきた。尤も、大坂詰めの財務担当者永井左藤治方へも依頼していたので、永井は直ちに千草屋家へ五百両を頼んだところ、もつともの依頼だが、やがて他の大名からも御頼みがあるだろうから、三百両を承知し、用意してくれた。残余分については、大坂より協議することとを、左藤治が元締方へ伝えたとのことであった。

なお、色々評議もし、玄八郎を近いうちに大坂へ行かすことにしているが、まず取りあえず、明朝江戸へこのことを伝える便を出すことにした。

(2) 八日の記述

一 八日、昨夜伝えていたとおり、午前八時、御家中全てが御屋敷へ登庁し 於鈴様の無事と幸せを祈念した。

一 藩の祈祷寺中寺も今朝がた、御機嫌伺いに来た。尤も、昨夜御横目を訪れ事態を聞き、のち、ご無事の御祈祷をしたということであった。

一 青蓮寺は、すぐにお尋ねし様子をお聞きすべきであるが、体調不良のため、代理の僧をして、お伺いが遅れる旨を伝えてきた、ということであった。

一 林田の松本屋太蔵は、昨日陣屋で地震の速報を聞き、驚いてすぐ様引き取り、また訪れて、江戸の大地震についてお悔やみを述べ、志を差し上げたいが、近ごろ損失などもあり不幸続きで、思うとおりにもいかない。少しで恐れ多いが金十両を差し上げたい、御受納頂ければ有り難いと伺ってきたと元締方が聞いた。家老としては、めずらしく志し厚いことだ、丁寧な礼を述べるよう言いつけた。

松本屋はすぐに、雨の中を引き返し、金拾両持参し差し出した。元締方はこの旨、早速江戸表へ申し上げるよう担当に申しつけ、家老としても直ぐに挨拶に行くところだが、取り込み中なので行けない、丁寧に取り繕って述べておくよう申しつけた。

一 揖保川東岸の小針忠太左衛門、杉尾慎三郎は江戸大地震につき、御機嫌伺いのため家老の役宅へ参上した。

一 興国寺も右に同じく当役宅へ参上した。

一 青蓮寺も右に同じく当役宅へ参上した。当初不調なので使僧をよこしていたが、今日わざわざ参上してきたとのことであった。

一 このたび、江戸で大地震、数多く御損じ処ができ、奥御殿も潰れ大変のこと、恐れ多いことです。これにより山崎藩領全てで報恩として、取り敢えず町方の次の者から寸志を差し上げたとい伺い出があった、と御奉行が聞き、感心なことなので、殿様に申し上げるべき事だと判断した。この春以来、色々出費が多く、御心配のおりから、容易ならざることであり、いかにも御当惑のことである。これまでは御領分への御労りもされてきたが、この度は非常事態である。いずれ仰せでられることもあろうか。その際は、是非奮発し努めてほしい。これらのことは、普段から伝えておくべきことであり、この際十分意が伝わらうよう考え趣旨の徹底を図った。

もつとも、門前屋五右衛門は御手元へ五両差し上げ、外に十五両御普請金へ献上したい。もし、この後、御用金等仰せ付けられるのであれば、御用金の中へ加えて頂ければ、と申し出ており、奉行は了とした。また、西新町魚屋官治よりは、大年寄方にまず預かり物を、其外は銘々まず所持することと触れるように、と願い出たので、この旨を申しつけた。

一 金拾両 前野善太夫 一 同五両（御手元へ）門前屋

外に（拾五両） 五右衛門

一 同式歩 本町松屋
茂兵衛

一 鳥目五百文 魚屋 一 同式両 岸田屋
官治 徳兵衛

七 江戸屋敷復旧調達金について

山崎藩にとつて、安政二・三年は大変な年であった。

二月の家中大火（侍屋敷六十一軒・本町三十軒・西新町三十五軒焼失）に続いての今回の地震。急飛脚によって被害の詳細が判明すると、直ちに対策を講じている……。災害見舞いには各所から次々訪れ、五両・十両の有志献金はあったが、調達金は中々目標額にまでは達しなかった。

藩では、町方・郷方の代表を集めて災害復旧資金の調達を図っている。『山崎町史』（昭和五十二年発刊）や『本多藩時代の山崎第一集』（平成十八年発刊）にその詳細を記載している。この時の調達金は、覚帳に「町方七十三人にて千六百両、郷方二百九十九人にて千三十七両」と記されている。

復旧途中の安政三年八月二十五日夜には、又々江戸を襲った大風雨によって、深川本所辺りが二・三尺の床上浸水し、山崎藩上・下屋敷も甚大な被害を被った。

この二年に渡る災害復旧で、多くの領民に大変なお世話になっ

安政2年10月 江戸・国元での主な動き

日付	江戸表	国元山崎
9月11日	国元へ月並(定期)間便発送 ・阿部大老よりの廻状1通と条約3冊写し	
26日		11日発送の間便届く
10月2日	午後10時ごろ 地震発生 50余ヶ所火災、両殿様、即刻御登城 夜、一統へ握り飯・粥下さる	
3日	・国元へ書状発送 藩士等へ御心付金(100疋~150文)下さる ・御詰番御廻状(3日夜着) 月番老中まで御機嫌伺いに出座すること	
4日	・御住居小屋着工 手軽に普請するよう御詰番御廻状あり	
5日	・御用番へ被害届け ・仁様 江戸出発	
6日	・銘々賑いとする	
7日	9時 供揃いで殿様登城	・4時ごろ 江戸からの地震に係わる書状着く ・9日予定の知四郎様養子縁組祝延期決定(丸岡藩有馬家) ・江戸屋敷破損につき、1500両を差し出すよう申し来る
8日		家中へ地震の概要を知らせる
9日	役所へ仮小屋の届け出	約32両の献金 ※以後、献金の申し出続く
12日⇒		中寺で地震平穩の祈祷
14日	御詰番より、大目付の達し、御用番請ける 材木等下値に売り、運賃等の引き上げ禁止	
21日		仁様 大坂到着
23日		午後4時ごろ ・仁様 国元到着 ・江戸13日出の間便着

上の表から、普通の間便で16日、早飛脚で5日かかったこと、江戸から山崎までの道程164里を19日かけて移動したことがわかります。

たので、安政四年十一月には、調達金に対して藩が「受取証文」を発行している。
忠鄰公の時代(天保五年)において、幾度ももの飢饉と災害により、度々借財を重ねてはいるが、山崎藩は藩士にも最大限の質

素儉約を図ることで、律儀にも返済期日を守り、財政危機を乗り越えた事実はどこかしら現代にも通じるようです。
小論は、「財団法人山崎本多藩記念館」が平成二十三年十月二日に発行した『本多藩時代の山崎』第四集(安政二年江戸大地震)

から本会報のために内容を抄出・整理しました。詳細については同書をご参照ください。
本稿掲載にあたりご協力いただきました本多記念館勉強会の皆さんに感謝申し上げます。

塩田城

藤原孝三

一 はじめに

山崎町塩田には、かつて「塩田城」が存在していた。播磨国でも知られた城で、近世の地誌（『播磨鑑』、『古城記』）にも記載があり、地元にも伝承が残されている。

しかし、詳しく調べられた結果は定かではなく、伝承をその根拠にしている様である。そのために、現在残されている「城跡」を实地に踏査して「城郭図」を描き、歴史的な事柄を検討して、その実情に迫って見たいと考える。

概要として感じることは、この城は、宇野氏の詰の城である「長水城」の出城である。勿論、現在の「城跡」は最終時期の姿であり、歴史的に何処まで遡ることができるのか疑問であるが、文献などを基に推測してみたい。

「城跡」としては小規模であるが、戦国時代後期のこの地域を包む状況において果たした役割は、決して小さくはなく、むしろ大きな意味をもった史跡と考えられる。

去る十二月二十五日、塩田自治会の皆さんと、現地で塩田城を考える会をして、地元の皆さんは村おこしのきっかけにしたいと随分盛り上がり、有意義な説明会になった。地元の関係者の皆さんに感謝している。

二 位置

兵庫県の西部、揖保川の中流域にある支流の菅野（すがの）川の上流部に塩田谷筋があり、その中央部に塩田の集落があつて、「字・政所（まんどころ）」の川向にある「字・谷」に塩田城跡が存在する。

この城の位置関係は、西播磨の戦国時代における「宇野氏」の歴史的な立場によることから考えなければならない。特に、佐用郡が織田方になった天正七年（一五七九）十月以降、毛利方である宇野氏にとって、内懐である蔦沢谷筋への不審者の侵入を防ぐためには、どうしても押さえなければならぬ重要なポイントであつた。

したがって、塩田谷筋から「長水城」への街道の入口には「大木戸」があつたと考えられる。

三 歴史的背景

① 赤松伊豆守家領地

天文年間の『春日部文書』の宇野村春書状に「塩田三カ村」が伊豆家領として記されている。この三カ村は、「塩田村」「土万村」「塩野村（現在塩山村の内）」であり、これらの政所（まんどころ）が塩田であつた。これらがいつ伊豆守家に宛行われたかについて考えると、次のようである。

応永十六年（一四〇九）九月四日の『足利義持御教書』に各地の領地と佐用荘上津方と共に、土万郷が伊豆守家総領で

ある「満則」への伝領が認められている。この「土万郷」が
そうであり、宛行はそれ以前であろう。

天文年間の年不詳、『宇野村頼書状』には、赤松守護家奉
行の難波備前守に対して「この地を渡すので、赤松晴政に披
露して欲しい」と述べている。

この事の確認のために、赤松守護家の宿老であった「小寺
政職」が、この城に来ていたのであるから、最初の「城」
は伊豆守家の政所を守るために構築されたと考えられ、小寺
氏が「塩田城」の城主と伝承されている事の実状と思われる。

②宇野氏の改修

宇野氏が赤松守護家の支配下にあった時期は、前記の事柄
も実行されていたであろうが、天文二十一年（一五五二）室
町幕府が尼子晴久に、備前・美作など六カ国の守護職を与え
た。この事により、備前の浦上政宗が赤松晴政に離反して尼
子晴久と結ぶ事態となった。

この動きは、播磨国にも及び、この地域を管轄していた「宇
野村頼」も守護家赤松晴政と分かれて尼子氏と結ぶ事になり、
西播磨の各地で戦う事になる。

このような状況下において、結果的に「城」は接収される
のが一般的である。では、現在の城への改修時期を推測する
ことにすると次のようである。

織田信長が「天下布武」を掲げて各地で合戦して、その支

配地域を広げてきた。

最初に西播磨に関係してきたのは、「天正三年（一五七五）
九月、荒木村重が播磨奥部に入り、人質を取り固め仰せ付け
られる。十月二十日、国衆参洛（『信長公記』）」とある。
この時期、宇野家当主は「宇野祐清」である。

天正五年（一五七七）羽柴秀吉、播磨に入り、上月城・福
原城を落とす。この時の十二月五日付、下村玄蕃助宛の羽柴
秀吉書状に「作州之内、新
免弾正左衛門尉人質を召連
罷出候間、居城させ此方一
味候事」とあり、織田信長
から吉野郡（美作）・佐用
郡（播磨）・八頭郡（因幡）
の三郡が与えられている（『新
免文書』）。

この時点において、宇野
氏は、織田側であったが、
天正六年（一五七八）七月
に上月城が毛利氏軍により
落とされた。それに伴い播
磨の国人らが毛利側になる。

しかし、翌年十月、それまで毛利氏と結んでいた「宇喜多
直家」が離反して、羽柴秀吉の勧誘により織田側に寝返った。



塩田城跡遠景

その結果、佐用郡が敵地になった。そのため「佐用郡からの防衛」を考慮する宇野氏により改修されたと考える。

その目的は、軍事的な事はもちろん、情報管理のために塩田村の入口に「木戸」も設置されて、街道の通行をチェックして厳重を期した。

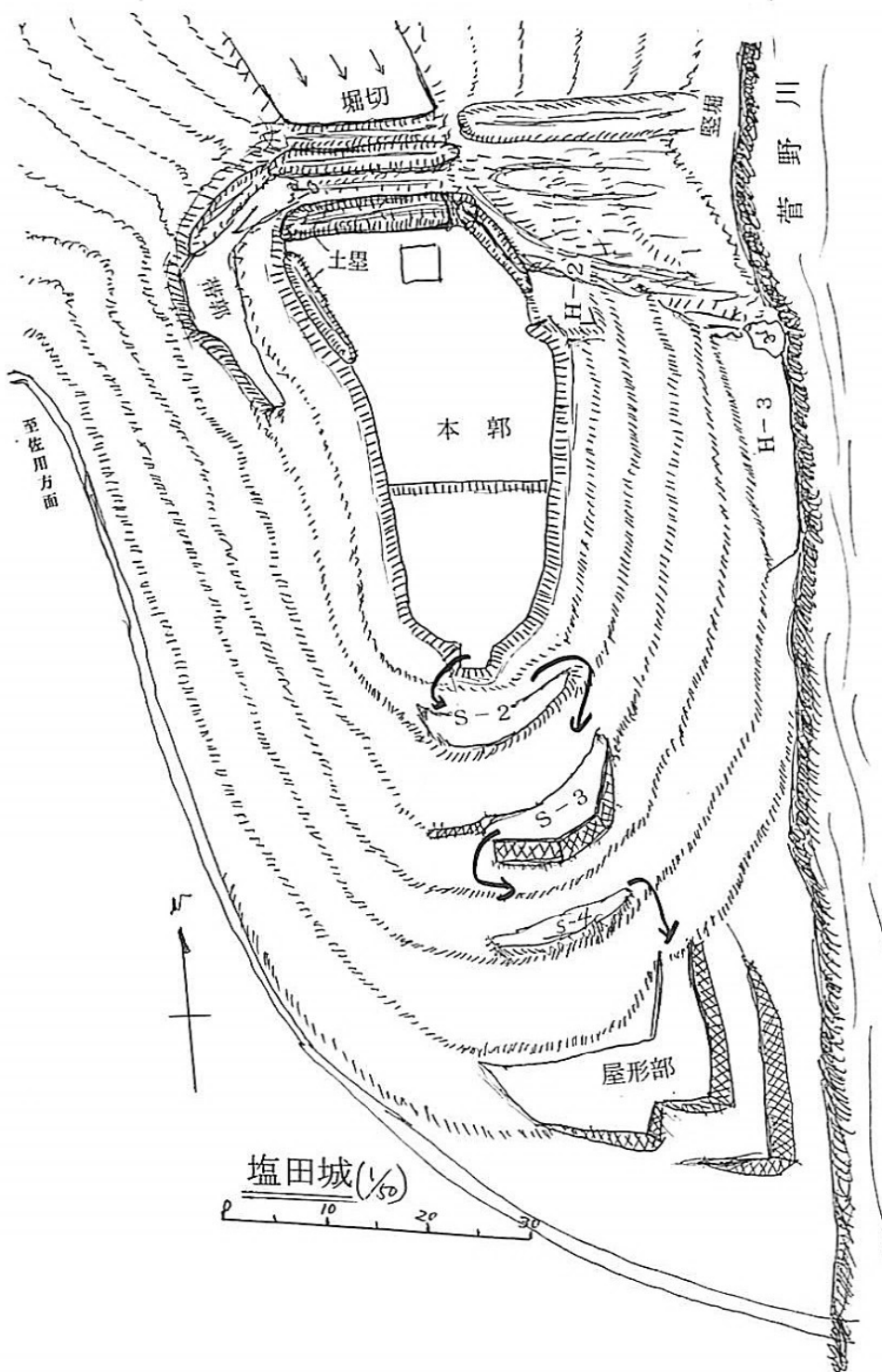
ていた。

この城の防衛的な方向は、山崎町葛根（かずらね）からの街道を主として構成されている山城で、大切な「水場」が分らない。川が近いこともあるが、今後に期待する。

四 城の構造

「塩田城」は、塩田集落の川西山系から派生する尾根の先端部を利用した比較的小規模の山城郭である。舌状の堀切の先端部を「二重の堀切」で区画し、土塁を持たせた削平部分を本郭とした単郭状で、南方向に数段の郭を設け、南麓に屋敷を構築していた。

城と平地の比高は三メートルであり、当時の街道の位置は現在よりもっと南方を通つ



塩田城 (1/50)

① 本郭

城郭の大部分を占める場所であるが、現在は灌木が茂り、数多くの倒木があつて正確な形状が判り難い。南北三六メートル・東西一七メートルの舌状の土地で北側には高さ三メートルの土塁が巡り、その両端にも低い土塁を配す。南端には下の郭へ下りる凸状の「虎口」と考えられる場所があり、三メートル低いところに「S-2」の郭がある。本郭内は小さな段差により二段に分かれており、北に「お大師さま」を祀る祠がある。西側に、「帯郭」を付随し、東側にも「小郭」を配置している。

② 堀切

二本の堀切の内、北の堀切は、幅二・五メートル長さ一五メートルで、東斜面に「豎堀」を構築しているが、西側は、炭焼窯が作られたため改変されており不明である。

南の堀切は、幅三・五メートル長さ一八メートル深さ三メートルで西に下がりながら、「西帯郭」へと続く。全体に土塁状で、西に下がる部分は土塁として構築されている。この「堀切」の東斜面にも「豎堀」が予想されるが、崩れにて正確なことが判らない。各所に残石が認められるが、どのように構築されていたのか、現状では不明である。

③ 帯郭

帯郭は、南の堀切より続き、西面の北側一〇メートルに構築されている。幅は、広い所で五メートルある。この部分に

「水溜」が予想される。西の街道を意識した配置で、この山城のポイントである西斜面の防衛を担当している。

④ 郭群

「本郭」から南の麓にかけて三段の郭（S-2、3、4）が設けられている。そのうち「S-3」は石垣（高さ一メートル）が構築されており、南麓からの防衛を意識した郭で、東西八メートル南北九メートルの逆L型で西端に下への「虎口」を設けている。「S-4」の実態は、近世の改変があり、よく分からない。また、東麓の川岸の幅八メートル長さ一七メートルの「H-3」郭があり、東方面の防衛を意識している。本郭の東上部に「H-2」があり、堀切部の「横矢掛け」が考えられる。

⑤ 屋形部

現在、民家の建っている二段の平地について、東面に高さ二・五メートルの石垣がある。

この石垣が、当時のものとの確証はないが、山城への登城ルートからみると、この場所にあたり、積み方も古い石垣である。

菅野川を渡る橋については、あつたものか、場所がここであつたのか定かでない。

この原稿は平成二十二年九月に北播磨城郭研究会を主宰されている藤原孝三氏がまとめられた「地域の山城・塩田城（調査第十一集）」から抜粋したものです。

金谷鏡と同型鏡の三重県桑名郡（現桑名市） 多度町多度山の神址出土鏡の 現地調査について

片山 昭悟

一、はじめに

兵庫県宍粟市山崎町金谷の古墳から大正六年（一九一七）に奈良時代の瑞雲双鸞八花鏡が出土し、東京国立博物館の金工室に所蔵されていることから湯舟口鏡として唐式鏡研究者にも知られている。（註1）

金谷鏡と同型鏡が三重県桑名郡（現桑名市、以下「桑名市」とする）多度町山の神址から昭和九年（一九三四）に出土したが、伊東富太郎氏の手拓本を残すのみとされる。

山の神址鏡については、梅原末治氏が紹介されている。

梅原末治「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」『史迹と美術』第二〇一号 昭和二十五年（一九五〇）によると、（一）伊勢國桑名郡多度村多度、山の神址出土瑞雲双鸞八花鏡 伊東富太郎氏の手拓本によるもので、昭和九年（一九三四）十月二十日に高坏とともに出土したとされている。

梅原末治氏は、播磨國宍粟郡城下村大字金谷で見出された鏡とまったく同様な鍔上りのよくない遺品として山の神址鏡と発表されている。

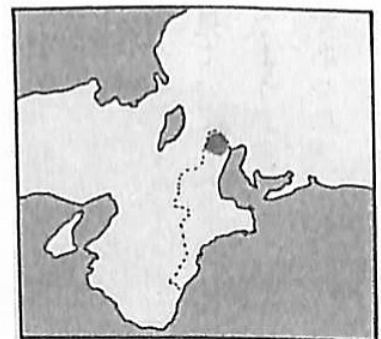
岡崎讓治氏は、「神門神社とその同文様鏡について」『大和文化研究』昭和三十五年（一九六〇）において、三重県桑名郡多度村多度の山の神址から蔓草双鳥八花鏡が出土したが拓影を残すのみで、現物は戦災のため焼失したとされている。

なお、この資料の中にも、兵庫県宍粟郡城下村大字金谷湯舟口から出土していると金谷出土鏡が紹介されている。

このほか中野政樹氏（註2）や杉山洋氏（註3）が紹介されている。

山の神址出土鏡については、梅原末治氏の「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」『史迹と美術』第二〇一号より瑞雲双鸞八花鏡の参考資料として必ず取り上げられている。ただ、山の神址鏡については文献のみであり、現物は不明である。

私は金谷鏡を調査研究テーマとして奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡を調査していると、山の神址鏡について



地図1 三重県桑名市多度町山の神址位置図 国土地理院五万分の一「桑名」

調査してみたいと思ひから三重県桑名市多度町香取の伊東春夫氏に手紙で拓本を依頼したところ伊東富太郎氏の貴重な拓本をご提供いただき、平成四年（一九九二）八月二十三日には、山の神社の現地調査をすることができたので概要を今回紹介させていただきます。

二、伊東富太郎氏の拓本について

伊東富太郎氏の拓本については、平成四年（一九九二）の五月十四日に三重県立博物館学芸課藤原氏を通じて五月二十七日に三重県桑名市多度町香取の伊東春夫氏よりご教示いただいた。

八月一日にお電話したところ拓本が見つかり送ったとのこと



図1 山の神社出土鏡 伊東富太郎氏蔵
拓本伊東富太郎氏

あり、幸運にもみつかったもので現物は戦災のため焼失したときれ拓本を残すのみであり貴重な資料を探していただいた。
なお、山の神社鏡の拓本とともに伊東富太郎氏が記載されている昭和九年（一九三四）十月二十日頃の出土についてのことも詳しくまとめられているので紹介すると、

鏡の拓本の四周に書いてある文字は、

右上 土器の図（赤鉛筆）高坏である。

右下 昭九、一〇、二〇（鉛筆）

左上 麓ヨリ三、四十間上ノ、二、三尺下層

左下 多度山の神社出土

三、山の神社出土鏡について

山の神社出土鏡について、昭和九年（一九三四）十月二十日頃の伊東富太郎氏の「日記帳」によると、「二〇日には記事なし、二二日「多度の人、山月にて古鏡掘出し、鑑定求めて」二三日には多度、七取（当時の当地の村名）両村長と共に出土地を見に出掛けました。」と記載されている。

伊東春夫氏のご教示によると、鏡の観察について、「肌は相当に荒れているように思われます。縁を見ていますと、美しい肌とアバタの縁の所は収まりが付かなかったようです」とのことであり、鏡については不明であるとのことであった。

山の神社出土鏡拓本で計測をしたところ、面径十一・四センチ

を測り、紋様表出もよく、金谷鏡と比較してよい状態である。

山の神址出土鏡は、金谷鏡より面径は〇・四センチ大きく、坂田寺鏡と面径は、ほぼ同じである。内区の径は、坂田寺鏡よりやや大きく平城京鏡よりやや小さいことから、時期的には坂田寺鏡よりやや遡り、平城京鏡よりやや新しいものとも考えられる。

いずれも近畿地方の出土鏡であり類似したタイプの瑞雲双鸞八花鏡である。

鏡が出土した地点については、多度の山上ではなく、多度大社の西に位置するところからの出土とされているとご教示いただいた。

続いて八月八日に鏡が出土した地点についてふたたびご教示いただいた。国土地理院五万分の二「桑名」によると、多度大社の西に位置する地点で、多度川が大きく蛇行するところで、標高約百二十メートルである。

鏡が出土したとされる多度は、奈良時代は交通の要衝であったものと考えられる。多度神社とも関連するものと考えられる。多度大社の和鏡群は、江戸時代の明和三年（一七六六）に神社背後の山頂から出土したとされる。

延暦十二年（七九二）の『多度神宮寺伽藍縁起並資財帳』によると、唐鏡表面と鏡式拾面が納められていたことが記載されている。また、多度大社の祭神は天津彦根命で、天一神社があり、桑名鋳物師の祭神であることが注目される。

四、現地調査について

山の神址出土鏡について平成四年（一九九二）八月二十三日に三重県桑名郡（現桑名市）多度町多度の山の神址の現地を訪れた。

この地は多度神社の西の多度山より派生する小高い山であり、この先端地より鏡が出土したとされている。今回、鏡については、多度神社前の丸繁さんにもご教示いただいた。

鏡は伊東富太郎氏の日記帳

によると、昭和九年（一九三四）十月二十日に出土している。

当時の経緯については、山の神址に地元による出資の旅館で「山月」があったが、経営が苦しく昭和八年に解散している。そして、名古屋の資産家の手に渡り、庭園を作るために山の神址を削平していると鏡が出土したもので、昭和九年（一九三四）十月二十日に出土している。

付近には「八壺谷」という景勝の地があり、その入り口の平坦地で山の神址からは、桑名一帯が見渡せる眺望が良い地でもあり奈良時代の鏡が出土するには好条件であるように思われる。

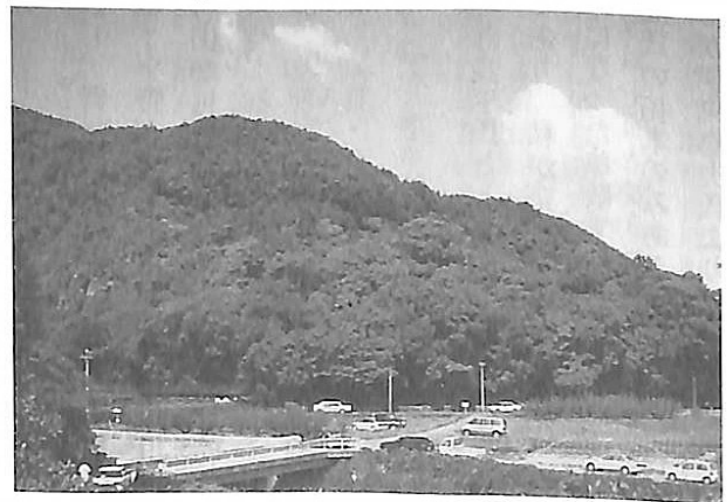


写真1 三重県桑名市多度町山の神址遠景（南より）

以上が現地調査の感想である。

その後、私はなぜ金谷鏡と同じ瑞雲双鸞八花鏡が三重県桑名市多度町の山の神址より出土したかを調査していたが、平成七年（一九九五）十一月三日に岐阜県の飛騨市国府町村山から瑞雲双鸞八花鏡が出土しているのを、高山市内で観覧し出土地点にも行く機会にめぐまれ、拓本による比較検討からとくに山の神址鏡と村山鏡は同型のように感じた。

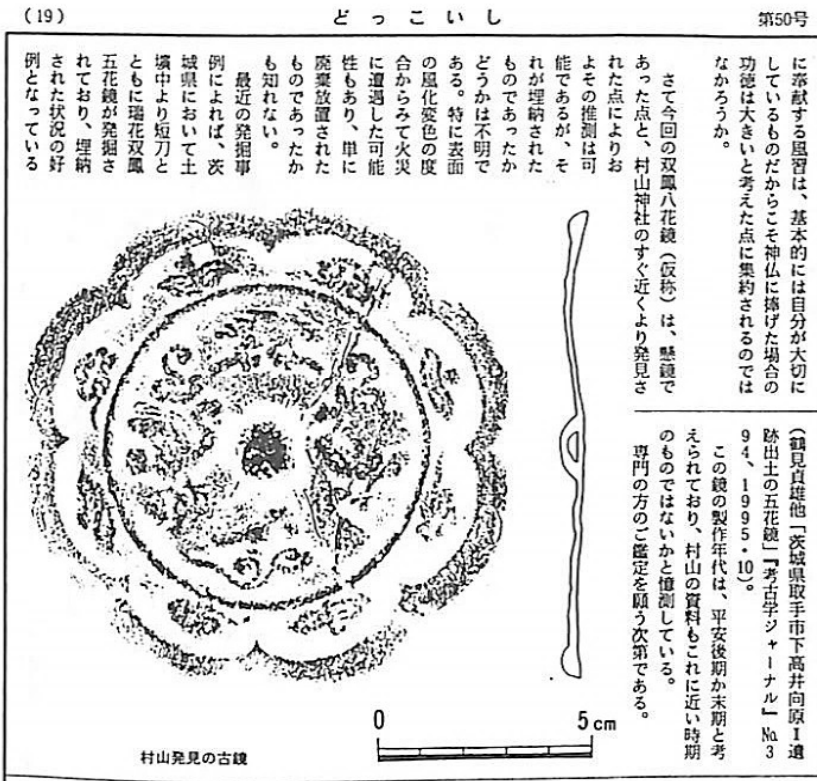


図2 村山鏡拓本（小嶋準一氏蔵）
「飛騨考古学会 会報どっこいし50号」より

平成八年（一九九六）十一月十日に日本考古学協会一九九六年度三重大会が津市であり出席することになり、JR関西線で名古屋から多度町付近の遠景について観察していたら出土地点の山の神址は、正面向かって右方面には多度山の山並みが続く先端部に位置している。

また、左方面には鈴鹿山脈の山並みが続く。多度山はなだらかな山並みであるのに、鈴鹿山脈の山並みは、尖った山々が続く、好対照のようである。そして、その手前には多度の台地のような小高い山が続いている。手前には長良川がゆるやかに蛇行する。ちょうど谷間が山の神址であり、多度大社にも近い地である。多度山は神体山のようにも感じた。

金谷は揖保川の段丘上に位置し、背後の国見山があり、山裾の湯舟口の小さな古墳があり、城下平野が広がる東方には揖保川が大きく蛇行し、川戸山や須賀の山が見渡せることから地形的にも奈良時代の鏡の出土地点に共通する地点のようでもあった。以上、出土地点の現地調査の概略について紹介させていただいた。

五、おわりに

伊東富太郎氏については、坪井良平氏とともに地道に調査をされていて人間的に魅かれる人であり、私が奈良時代の鏡研究、鋳物師、梵鐘研究をするきっかけになった尊敬する人である。

山の神址出土鏡は伊東富太郎氏の拓本のみあることからこれまで多くの先生が紹介されているが伊東春夫氏より貴重な資料を兵

庫島の宍粟市山崎町金谷の私にご提供いただいた。

ふるさとの金谷鏡について一つでも心の込めた文章にしたいとの思いから書きとどめたもので、平成四年（一九三四）八月二十三日に現地調査して二十年が経とうとしていることから拙著『奈良時代の鏡研究 出土地・伝世地を訪れて』をもとに山の神址出土鏡調査の一端を紹介させていただいた。

（註1）片山昭悟『金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡・金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡を中心にして』一九九二

片山昭悟『金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡・全国の瑞雲双鸞八花鏡集成』一九九二

金谷鏡は、面径十一センチ、縁の厚さ〇・三五センチ、重さ一三〇グラムを測る。八世紀後半の時期とされる。

大正六年（一九一七）に出土し、大正八年（一九一九）帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈されている。東京国立博物館蔵鏡であり、湯舟口鏡として唐式鏡研究者にも知られている。兵庫県宍粟市山崎町金谷の古墳から出土している。

（註2）中野政樹「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその铸造技術」『東京国立博物館紀要』第八号 東京国立博物館 一九七三

24三重県桑名郡多度町多度 山ノ神址出土

（59）瑞雲双鸞八花鏡 径不明

鏡背文様は、24）千葉県香取郡香取町香取神宮伝世鏡

と同じもので、同范鏡は十面が知られる。（同范鏡20）梅原末治「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」『史迹と美術』第二〇一号 によれば、鑄上りはさまでよくなく本邦製踏返し鏡と見られるという。昭和九年十月に高坏と共に発見されたものであるが、実物は焼失してしまつたとのことである。銅質・寸法など不明である。

（註3）杉山洋「唐式鏡の生産と流通」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会一九九五

杉山洋『唐式鏡の研究 飛鳥奈良時代金属器生産の諸問題』鶴山堂二〇〇三

山ノ神址鏡は、梅原末治の報告によるもので昭和9年（一九三四）10月20日に高坏とともに出土したものである。現物は焼失してしまつたとのことと詳細は不明であるが、片山昭悟によって伊東春夫所蔵の拓本が紹介された。拓本による限り、各文様単位がはっきりしており、かなり早い段階の鏡と推定される。

■主な参考文献

梅原末治「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」『史迹と美術』第二

〇一号 史迹美術同致会 一九五〇

岡崎讓治「神門神社とその同文様鏡について」『大和文化研究』

大和文化研究会 一九六〇

新篠の丸私記 (三)

深川 定義

(第一一六号から続く)

十 光景篠の丸へ入城

光景の縁談は順調に成立したようだが、異説もある。安積と小
林兵庫が長水へ申し入れた時、既に政頼のもとへ、広島の毛利の
筋から光景と祐清兩人の縁談があり、祐清は内定していた。政頼
は光景にこの縁談をすすめ、小林の娘が好きならば、妾にしたら
どうかと言った。光景はこれを拒否し、政頼も光景の希望を容れ
た。||熊見義水榎雄説 / トルツェル

政頼は、当時空き城となっていた篠の丸城を改修して、光景を
容れることに決した。それまでは、宇野源一郎光景であったの
を、これより篠の丸城主として、改めて熊見蔵人光景と名乗るこ
とになった。時に永禄十年(一五六七)卯四月上旬であった。

光景の家老五名左の通り。

- 一、高嶋甲斐守直隆
- 二、有元治郎左衛門祐美
- 三、安積弾正盛長
- 四、志水八右衛門永宗
- 五、高見新左衛門善信

十一 遠矢の禍 (わざわい)

篠の丸城の光景は、特に異変なくめでたく月日を送るうち、時
は天正元年(一五七三)酉春三月上旬、光景は一族を連れ、鳥獸

- 中野政樹「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および
同范鏡の分布とその鑄造技術」『東京国立博物館紀要』第八号
東京国立博物館 一九七三
- 杉山洋「唐式鏡の生産と流通」『生産と流通の考古学』横山浩一
先生退官記念事業会一九九五
- 杉山洋『日本の美術 古代の鏡』至文堂一九九九
- 杉山洋『唐式鏡の研究 飛鳥奈良時代金属器生産の諸問題』鶴山
堂二〇〇三
- 小嶋準一「飛騨考古学会 会報どっこいし50号」飛騨考古学会
一九九五
- 藤澤一夫先生卒寿記念論文編集委員会編「奈良時代の鏡 金谷
一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』
二〇〇二
- 片山昭悟『金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡 金谷一号墳出土の
瑞雲双鸞八花鏡を中心にして』一九九二
- 片山昭悟『金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡 全国の瑞雲双鸞八
花鏡集成』一九九二
- 片山昭悟『奈良時代の鏡研究 出土地・伝世地を訪れて』一九九
八

を捕らんと従者に弓矢鉄砲を持たせて出かけた。

この山崎の山は、山の尾の長いことは播州一というが、尾根伝いに上牧谷の上の高い山、笹の丸というこの山と長水城は真向い合せになっている。この山頂に到って光景は家臣らと共に一休みする。(この山は、篠の丸城とは別の山、今は宍粟五十名山の一つ、高さ五一二メートル) 家臣の者が、「我が君は弓術の名手と聞き及ぶが未だ御手の内を拝見せず。彼の長水城まで矢を射遊ばすや」と申せば、光景は「それはいとやすし。一同見ておれ。」と重藤五人張りの弓を張り、白羽の矢を持って、一矢仕ると、長水城指して放てば、城の門柱に二寸ばかり、突き立った。(笹の丸から長水城まで矢が届くかどうか。地図を見れば直線距離はそう遠くないから、遠距離用の弓矢ならば届いたであろう。|| 筆者注)

長水城の門番驚いて、このことを報告すれば、政頼は四方を見渡して、「西の笹の丸山に多くの人が居るようじゃから、早く見て参れ。」と申されれば、神山但馬守正明早速馬に乗って笹の丸山に登り、見れば光景一行であった。神山が、「何故門柱に矢を射られしか。」と問えば、光景「今日拙者らは鳥獸狩りに来たのだが、家来の者が長水まで一矢射て見せてくれと申すので、試みに放った。門柱に当たるとは思いもよらず。」と答える。但馬守、長水城へ帰って政頼に事実を報告すれば、政頼は、故意でなければ、そのまま済まそうとする。ところが、お忠がこれを聞き、政頼に向かい「如何に我が子なりとも、城門に矢を射るとは

許し難うございましょう。斬捨てても良きところなれども、きついお咎めあつて然るべしと存じます。」と申し上げる。

よつて、政頼は篠の丸城の光景へ使者を以てお叱りの言葉。光景は家老高嶋甲斐守を長水城へ上らせ、深甚なお詫びを申し上げれば、ひとまずは、これにて一件落着となる。

十二 足利義昭

この年、天正元年(一五七三)は足利幕府の亡んだ年である。つまりこれを以て室町時代の終わりとし、これより慶長八年(一六〇三)徳川家康將軍就任、即ち江戸時代の始まるまでの過渡期、いわゆる安土桃山時代に入る。とはいうものの、戦国の世相には変わりはない。

足利最後の將軍義昭は、この年七月宇治槇島城に拠つて、織 本田信長に反抗したが、同月十八日二歳の息子を人質に差出して降伏。側近の臣少数と侍女若干名を連れて、同二十日河内若江城に亡命。八月には毛利氏(小早川)を頼み、備後鞆に入り、同所に長く住んだ。義昭に妾二人あり。一人は三位局と呼ばれ、古市胤栄の娘である。人質の息子と共に岐阜城に連行された。一人は春日局と呼ばれ、義昭と鞆へ同行した。この人は宇野政頼の娘お慶と思われる。(童門冬二・池宮彰一郎説) 義昭は、後に秀吉から一万石を与えられて大坂に住み、慶長二年(一五九七)に六十一歳で死去している。

十三 政頼姫路へ

天正七年（一五七九）三月上旬、羽柴秀吉の使者が長水城へ来て、宇野政頼に対し、秀吉に一味するよう申入れその返答を求めた。政頼は、翌日百五十人の家来を連れ、五十波村を立ち、同日暮方姫路に着いた。その夜は城下に一泊し、翌日登城して秀吉との会見を待った。然るに、秀吉は囲碁に興じて一向に会わず、政頼は大いに立腹して帰ろうとしたが、秀吉の臣・谷大膳清好が、秀吉へこの旨を申し上げれば、秀吉は了承して、本領安堵を申し渡した。かくて秀吉は、東播三木の別所氏征伐のため打ち向かうこととした。

政頼は、一先ず本領安堵を思い、秀吉との争いを避け、五十波村の構には、政頼の従弟宇野采女正祐政を入れ、篠の丸城には、嫡男熊見藏人光景を入れて守らせることとした。長水城には政頼と共に二男民部大輔祐清が籠った。こうして一時的には、政頼が秀吉に帰伏した形で両者の間に和睦が成立したはずだったが……。

十四 高見と小林

天正七年（一五七九）四月中旬、長水の家臣小林又四郎が、篠の丸城へ深夜に来ていたのを、光景の家臣高見新太郎が見咎め、両者の口論が激しく、遂に公式の裁きに及んだ。五十波村における裁判は、全く不公平なもので、政頼は高見に切腹を申付けた上、更に光景にも、「屹度慎め」と叱り付けた。篠の丸一党は、「高見に切腹とは、何たる非道」と憤るが、政頼が相手ではどう

にもならない。

同年五月、政頼は突然予告なく篠の丸城へ登る。光景は「父上御入来」として種々馳走し、有元祐美、安積盛長、志水永宗の三家老も同座して、午前中は茶の会、午後は酒宴をなす。酒の酔いもあつてか政頼は、「高見新太郎の切腹のみならず、斯様な不屈きは光景も同罪なり。屹度慎め」と大いに怒り、叱り付けて、同日夕方長水城へ帰った。光景は何も言わなかったが、心中大いに怒り、政頼祐清父子に対して、三家老と共に深い怨みの念を抱くに到った。

（次号へ続く）

やまさき文化協会・山崎郷土研究会

研修旅行に参加して

宗平圭司

平成二十三年度の研修旅行は、昨年十月二日（日）岡山県吉備の里へ、両会員合わせて四十四名もの参加を頂き、次の名跡を訪ねました。

◇旧足守藩侍屋敷見学・散策

羽柴秀吉の妻ねねの兄木下家定の子木下勝俊が関ヶ原の後移り住んだところであり、一帯が公園としてよく整備され、城下町と

しての雰囲気が残されていました。
幕末の医師緒方洪庵の出身地でもあり、その屋敷跡では、ボラ
ンティアによる解説を頂きました。

◇高松城址

天正十年（一五八二）羽柴秀吉による水攻めで有名な城址に
は、清水宗治の首塚があり、近くの蛙ヶ鼻には築堤址が残され、
当時の様子を垣間みることが出来ました。

◇備中国分寺散策（参拝）

総社市南部の美しい丘陵地帯にあり、
聖武天皇の発願によつて諸国に建立された
一つの寺です。

建物は、南北朝時代に消失したと伝えられ、南門や中門など数多く残る礎石から当時の壮大な様子が伺えました。現在の建物は江戸時代に再建されたとのこと
です。

また、吉備路の代



夕映えの備中国分寺五重の塔

表的な景観として知られる五重の塔があり、国の重要文化財として、威厳を保っていました。

◇吉備神社

桃太郎伝説のふるさと吉備国の総鎮守で、祭神は吉備津彦命。比翼入母屋造（ひよくいりもやづくり）の本殿及び拝殿は国宝。南嶺の茶白山古墳は、吉備津彦命の墓と伝えられています。

拝殿より南に続く長い回廊を経て、右手に見える入り母屋造りの建物は、鳴釜神事で知られています。

釜が終日焚かれており、死後もうなり声を続けた温羅（うら）の首が竈の下八尺に埋められ、今もうなり声をあげ、吉凶を告げると伝えられています。竈にかけられた釜が大きく鳴れば、「良い知らせ」音が低かったり、鳴らなかつたら「悪い知らせ」と言われています。（上田秋成の雨月物語に出てきます）

◇当日は多数のご参加を賜り、天候にも恵まれ、古代吉備王国を満喫することが出来ました。

もう一ヶ所鬼ノ城・岩屋の散策を予定しておりましたが、狭路のため大型バスが進入できず、皆様のご期待に添えなかつたこと、深くお詫びいたします。

有意義な一日研修が無事終了しましたこと、ありがとうございます。

事務局だより

平成二十四年度郷土研究会総会のご案内

本会の総会を次のとおり実施しますので、多数ご参加くださいますようご案内します。

日時：平成二十四年四月二十九日（日）午後二時から

場所：宍粟防災センター 四階 会議室

内容：事業、会計報告、新年度事業計画、予算審議

記念講演に替えてビデオ鑑賞「しそくの逸話」（最新版）

パンフレット・デザイン広告・名刺・封筒・伝票
新聞広報誌・ポスター・案内状・シール等



(有) 稲田印刷

〈本 社〉〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764
〈一宮店〉〒671-4133 兵庫県宍粟市一宮町須行名496
TEL (0790) 72-8600 FAX (0790) 72-8611

まごころを伝えます。

地酒



確かな品質と味わい。

一献献上 品質本位



SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします



〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)
TEL(0790)62-7588
FAX(0790)62-0770



外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL⑥20036

いさだに
生谷温泉 伊沢の里

いつも伊沢の里をご利用くださいます。ありがとうございます。心から感謝を申し上げます。これからも、是非、お祝い、ご法要、ご会食、団欒など会席料理から鍋物、そして定食など、なんなりと是非お申し付けくださいませ。ご予算に応じて調理させていただきます。また、無料送迎バスもご利用ください。おいでをお待ちいたしております。

Tel.0790-63-1380 Fax.0790-63-0362

PHOTO-STUDIO
Meyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本 店 TEL (0790) 62-0700
さつき通り FAX (0790) 62-2117
ブックランド店 TEL (0790) 64-2051
山崎町中井 FAX (0790) 64-2052